

大草谷津田いきものの里自然観察会

春を待つ植物たち

佐野由輝（大網白里市）

日 時：2020年2月2日（日）10時30分～12時 天気：晴れ

参加者：20名（大人 13名、子ども 7名）

担当指導員：佐野由輝、小川洋子

2月最初の日曜日は青空が広がり暖かな太陽に恵まれ、汗ばむほどの陽気でした。

今回のテーマは「春を待つ植物たち」、厳しい寒さの冬を生き残るのは植物にとっても大変です。植物たちに秘められた生き残り戦略を観察しました。

まずは、樹木の冬芽の観察です。1本1本見比べると、冬芽の形、大きさは様々です。ムクノキの冬芽はよく見ると大きな冬芽の脇に小さな冬芽がありました。この小さな冬芽は何のためにあるのか聞くと、男の子が悩みながらも「予備のためかな」とつぶやきました。ご名答です。万が一に備えているんですね。冬芽をよく観察すると、何枚も服を着ていることが分かりました。続いて、コナラの冬芽の観察。コナラは寒がりなのか、ムクノキよりもたくさんの服を着ていました。枝先のコナラの冬芽は特に大きく、既に冬芽の中に次の年に伸びる枝葉や花が全て閉じ込められています。さらに、枝をよく観察すると何列もの筋が入っている箇所があります。これは、冬芽の服を脱ぎ捨てた跡です。今度は、ニガキの冬芽。ニガキの冬芽は何と裸ん坊。ルーペでよく観察すると、ふかふかの葉っぱが縮んだ姿をしています。ニガキの冬芽の元には葉っぱが落ちた痕が。その跡をよくよく観察すると、小さなぶつぶつが見えます。実は、このぶつぶつ、根っこに繋がっていて、水を葉っぱまで運ぶ管だったのです。いろんな樹木の冬芽を観察していると、子どもたちの観察眼が鋭くなってきて、ゴンズイやツリバナでは、冬芽の位置が互い違いになっていることを発見。枝葉が重ならないようにしているんですね。

樹木の次は、田んぼの畔道では地面に張り付いている植物を観察しました。種類はいろいろだが一様に葉を放射状に広げている。どうしてこんな姿になっているのか考える前に、地面を触ってもらいました。すると、「暖かい」との声が。地面のぬくもりを感じながら、効率よく太陽の光を浴びるために放射状に這いつくばった姿になっているんですね。

活動を停止しているように見える植物も春の準備をしており、吉田兼好の徒然草の「木の葉の落つるもまず落ちて芽ぐむにあらず 下より萌しつはり耐えずして落つるなり」の一節を引用し、自然界では常に次の季節に備えていることを話しまとめとした。

